

大学ルネッサンス

名誉教授（元学長） 手島 孝

すべては、一九九一年春、永尾孝雄君からの、久闊を叙する一本の電話で始まった。同君は、当時、県立「熊本女子大学」の助教授。かつて、法哲学専攻の九大大学院生で私の憲法ゼミにも熱心に出て来ており、真摯な学究、敬虔な基督者として強い印象を残していた。

その夏、熊本女子大学から松垣裕学長が来訪。今般熊本県が唯一の県立大学の女子大を学部増設・共学化して賦活するに決したにつき、万端差配をとの要請。分に過ぎた予期せぬ依頼に、かねて産土の筑州を一所懸命の地と思い定めていた五十八歳は戸惑った。

しかし、それでも何度となく足を運ばれる学長の熱意と懇望に私の心は動いた。何よりも、問わず語りに知れた痛切な二つの共通体験に私の琴線が共振した。一つは戦争体験。私も軍事教練に勤労働員に空襲に翻弄されたが、年長の松垣青年は学業半ばに学徒出陣、戦敗れてシベリア抑留の辛酸を嘗めた。下って今一つは「大学紛争」体験。怒れる学生たちの叛乱に、熊大と九大それぞれで大学側の衝に当たった我々は立ち竦んだ。嵐去って後に遺った頽廢とめどない大学の惨状は、我々に学問と大学の未来への深い憂いを同じくさせていた。

知事にも会い、私は清水の舞台から飛び降りた。翌年一月準備委員会発足。県を挙げての全力投球が始動する。「大学」ルネッサンスへの夢を託し、私は微力の限りを尽くした。これを、福島讓二知事が全面バックアップ。旧制の高校・大学に学んだ知事の「大学」観、真の学問の府への畏敬は、私と揆を一にしていた。知事は、大学人主導の準備委員会に一切を信託し、自らは、要るもの（かね）は出すが口は出さぬ大度の王道に徹した。

九四年四月、幾多の困難を乗り越え、改造成って名実共に面目を一新した「熊本県立大学」船出の銅鑼が鳴り響いた。開学半世紀記念の年が、直ぐそこ一九九七年に迫っていた。

いま、二〇一七年。ただ消え去るのみの老兵、ひとり、二十年前相擁して五十周年を共に祝った今は亡き同志たちに、うたた万感の思いを馳せる。

生活科学部から環境共生学部へ

名誉教授（元学長） 菅野 道廣

創立七十周年を心からお慶び申し上げます。

私は平成九年四月から七年半の短い在職でしたが、九州大学在職中から環境共生学部の創設（実際には改組）準備委員として再三足を運び、意見の集約に参加しました。環境資源と居住環境の先生方は、例を見ない学部の立ち上げに先端的な学術理想主義理念で取り組まれ、専攻制としたことも大改革でした。学生の教員資格など無用と主張して同窓会との軋轢を生み、手島学長は板挟みとなり、侃々諤々の討議の結果なんとか継続することになり落ち着いたのは印象に残ります。

文部省の設置審議会で「環境共生は目的か方法か」など難問を受け苦汁したものです。食物健康分野では、管理栄養士資格という枠があり、厚生労働省の指針に叶う教員の構成に努め、医師教員の採用を決めていましたところ、管理栄養士以外の例外規定はこれまで一度も適用されたことがないと拒否されました。交渉を重ね協議しましたが折り合いがつかず、結局学部長として「次期教員には管理栄養士を採用する」との一札を入れて切り抜けました。

ともかくわが国で初めての環境共生学部が立ち上げられ、環境関連分野の幅広い知識をも身に着けた卒業生が広く活躍している現状は何よりのことです。健康分野でも博学な管理栄養士が、国民の健康維持に大いに寄与していると自負しています。

在職最後は学長として制度改革の渦の中で新しい運営組織を立ち上げるなど、新企画を導入しましたが、時期を得ず後に託し勤めを終えました。現状は望外の感です。

優れた学生諸君、そして事務職員の積極的協力がとても印象的で、短期間ながら真に印象深い経験でした。専攻制は学科制に改められましたが、齢八十余歳の身で当時の熱気を今でも思い起こしています。熊本県立大学の一段の発展を刮目しています。

創立70周年の夏に思うこと

名誉教授（元学長） 梅林 誠爾

大江渡鹿の熊本女子大学に勤め始めた年も、今年のように暑い夏であった。主として教養の哲学担当の教員として理解し難い授業を何とかこなし、学生、教員、職員の方々にお世話になりながら、私は7年前に退職した。

健軍町への移転と二学部改組、文学部学科名称の変更、大学設置基準の大綱化による教養課程の改変と総合管理学部新設、男女共学化、大学院新設、大学自主評価の導入、大学の法人化、文学部教員組織の改編の試みなど、難しい課題が続いた。

しかし、一番難しかったのは日々の講義であったように思う。学生諸君と教員との間には、壁を作らなくても、初めからいくつもの壁がある。特に若い教員にとっては、育ててくれた研究者仲間の理念、学説、方法が全てである。ところが、広い世界に羽ばたこうとしている学生諸君にとっては、そうした理念、学説、方法などは自分に関係がないもの、特別に狭い世界のように見えるようだ。私は、ある卒業生から、「先生は私たちの方ではなく、別の方を向いていた」と厳しく指摘されたことがある。

しかし、壁があればこそ、それを乗り越える講義も必要となる。私は権威に訴えて、有名な哲学者の古典に触れてもらうようにした。カントやヘーゲルを読むことも考えた。しかし、言葉の壁がある。翻訳書では却って難解だ。試行錯誤を経て、『方法序説』をデカルトの人生選択の物語として読めば、親しみやすくなるということに気づいた。

だが、デカルトもなお難解だ。同僚の先生たちに倣って、私も出席カードの裏に意見や質問を書いてもらった。質問や意見には答えなければならない。これが大変だった。大人の一方的な意見を答えてしまったこともある。質問などの中に、共同の立地点を何とかして見つけ、それを中心に答えを書く必要があったのだ。

学生諸君に壁を越えてもらうつもりが、私の方から壁を越えなければならないようになったように思う。互いに壁を越えようとする緊張した関係を体験できたことに、感謝しなければならない。哲学に関心を持ってくれた学生諸君には、深く感謝しよう。

県立大学の皆様の一層の発展を祈念します。

創立70周年に寄せて

名誉教授（元学長） 米澤 和彦

創立70年、まことにおめでとうございます。心より、お祝い申し上げます。

顧みれば、私が赴任したのは昭和56年、ちょうど大江から現在地への移転直後であった。この時学部も文家政学部1学部から、文学部と生活科学部の2学部制となり、私は生活科学部に所属し、教養科目のほか、新設の生活経営学科の専門科目と卒論を担当した。

ところで、新しい体制での大学の発展とともに、昭和50年代後半から、細川県政のもとで盛んに議論されたのが男女共学への移行の問題であった。結局、同窓会「紫苑会」を中心とした反対運動等もあり共学化は頓挫したが、当時同窓会長で文学部長でもあった一瀬幸子先生のご心労はいかばかりであったか、と思う。

この共学問題が急速に進展したのは、次の福島県政のときであった。当時の学長は松垣先生。あるとき先生に学長室に呼ばれ「社会科学系の学部を作り、この学部を核に男女共学を推進したい。ついてはその計画を中心となって推進する大物教授を知らないか」と相談を受けた。その時、真っ先に私の頭に浮かんだのが九大法学部の手島孝先生。そのことを松垣学長に申し上げると、「すぐに手島教授の意思を確認してくれ」とおっしゃった。そこで同僚の永尾先生と2人で手島先生をお訪ねし、本学就任を懇願した。手島先生は「しばらく時間をくれないか」と即答は避けられたが、その後、松垣学長、および福島知事じきじきの要請もあり、快諾された。

手島先生は日本最初の「総合管理学部」を構想されるとともに、学長として男女共学の推進に尽力された。また、先生は人文・自然・社会科学の3学部のバランスのとれた発展こそ総合大学に不可欠と考えられ、生活科学部の改革に着手されるなど、まさに県立大学発展の最大の功労者であった。

この女子大から男女共学の県立大学への移行が第1の変革であったとすれば、第2の変革は平成18年の公立大学法人への移行であった。

初代理事長には蓑茂壽太郎氏が就任。蓑茂理事長は私立大学での経験を生かして、大学の行・財政改革に大胆に取り組み、法人化した大学組織の基礎を築かれた。私は学長として教学部門を担当し、大学院博士課程をすべて3学部に整備したほか、大学の教員組織を生かしての地域貢献等に尽力した。このような地域貢献活動は全国的にも高く評価され、平成20年度の第4回大学地域貢献ランキング（日本経済新聞社）で堂々全国第1位を獲得することが出来たことは、望外の喜びであった。

今後とも「地域に生き、世界に伸びる」をスローガンに、わが国有数の公立大学として発展されることを祈念いたします。